

四月、新たなのであいに、胸をときめかしている子どもの笑顔が見えるようです。コロナ禍で大変ですが、わくわくどきどきの楽しい毎日がおくれるといいですね。子どもの心の声を読み取っていただけたらと思いつの授業で生まれた二編の詩を紹介します。

自分 五年 真人

多くのクラスには、足の速い人もいるし、勉強ができる人もいる。ぼくは勉強もふつうだし、特技もない。だから、何かの特技やみんなよりできることがほしい。だけど、見つからない。だから、ずっといろんなことをやりながら、特技やできることをさがしている。だけど、ぼくはそうぞうするのがすきだ。好きな物をこわして、自分のそうぞう通り、自分に作らえるのが好きだ。

自分のことを深く見つけて書いた高学年らしい詩です。「真人君は何でもできるのですが、自信がないんですよね・・・。」と担任の先生。五年生は思春期の入り口に入り、他の人と比べたりして、集団の中で自分の存在が気になり心揺れる時期です。何でもできる真人君でもこのような悩みを持っていることを知り学級の仲間が悩みを共有でき、ほっと安心したの

今日の視点

35 人学級で子どもたちと笑顔の日々を

ではないでしょうか。

変わった自分 四年 拓人

三年のころ、ほぼ毎日手をあげなかった。答えはわかっているけど、手をあげると、はずかしい。指されても、まちがったらどうしようとなかなか声が出ない。四年生になって、「二時間に一回は手をあげないとだめ」と、先生が言った。答えがわかったら、ひしひしに手をあげた。指された。はずかしいのをがまんして答えを言った。あつていた。とてもうれしかった。その後、なぜか何度も手をあげられた。

教師の励ましの一言が子どもたちの心を揺り動かします。ちよつとシャイな拓人君ですが、担任の先生の一言が心に届き見事自分を変身させ、新しい世界へと一歩踏み出すことができたのです。

このコロナ禍でも、心ある人々の大きな運動が国を動かし、三十五人学級が実現できたことはすばらしいことです。

少人数学級がすすめば、一人ひとりの子どもに寄りそいさらにきめ細やかな指導が可能です。ある自治体では小・中全学年で三十五人学級を実現したそうです。一年でも早く前にすすめたいものですね。

(金田一)

東京民研の窓



マスクをつけての授業が一年も続きました。マスク越しではうまくこちらの思いが伝わらない、そんなもどかしさを感じます。鏡の前で授業をしています。ビデオを撮ることもあります。少しでも伝える力をつけたいと思うからです。「教師は役者になる」これって、結構はまります。コロナが終わったら劇団のテスト生にでも応募してみましようか。(井本)

三月・四月は、別れと出会いの時。家の改築工事を頼んで、来て下さった大工さんの中に22歳になったという教え子がいた。大工にもいろいろ働きの人があつたが、短時間で図面をもとに建てるより、住む方を思い浮かべながら、その「声」「暮らし」に合わせたオーダーメイドの丁寧な家づくりがしたくて、「とその志しを話してくれた。控え目でもの静かな子だったが、そのまなざしの中に、澄みきつた空を見た思いがした。コロナ禍でも、四月は出発の時。(高木)

同性婚を認めないのは、憲法に違反するとの判決が出た。私自身についていえば、LGBTについては、ほとんど何も知らずにやって来たのが、本当のところだ。基本的人権に対して、これまでしていなかった配慮が求められている。マイノリティ(少数派)であっても、それを認めて尊重していく。それが、民主主義の根幹だ。教育を司る私たち教職員は、子ども・保護者・地域のみなさんの声に耳を傾け、敏感に汲み取っていくことが何よりも大切だ。(渡部)